

平成20年度重点プロジェクト事業（海外派遣研究員旅費）報告

World Congress of Performance Analysis of Sports VIIIに おける研究発表

高橋仁大*

今回、学長裁量経費によりWorld Congress of Performance Analysis of Sports VIII（以下、WCPAS8）における研究発表の機会をいただいたので、ここに報告する。

WCPAS8は2008年9月3日から9月6日にドイツのマグデブルグ大学（Otto-von-Guericke-Universität）で開催された。マグデブルグ大学は、ドイツ語での大学名としても冠されている、オットー・フォン・ゲーリケが1600年代に行った、いわゆる真空の発見に関する実験が行われた、由緒ある大学である。同大学のシンボルマークにもゲーリケの顔がデザインされており、その歴史を感じさせた。学会初日のウェルカムレセプションでは、十数頭の馬が内部を真空にした鉄球を引っ張るといふゲーリケの実験が再現され、参加者を大いに沸かせた。

さてWCPASは今回で第8回目の開催である。日本ではあまり聞き慣れない「Performance Analysis」という研究分野の構築を目指し、スポーツの実践

場面を対象として、様々な分析の手法やトレーニングの効果についての研究を行っている。

今回のWCPAS8は、現在International Society of Performance Analysis of Sportsの会長であるDr. Peter O'Donoghueのキーノートレクチャーで幕を開けた。Dr. Peter O'Donoghueは、元々はComputer Scienceを専門とする研究者であり、そのバックグラウンドからスポーツの分析に様々な統計手法を駆使することで、新たな理論を導いている。今回もテニスを題材に、選手同士の相互作用（interaction）について興味深い発表を行っていた。

今回会場となったドイツにおけるPerformance Analysis分野の研究成果についての講演も設定されていた。しかしまだドイツではPerformance Analysis自体の理解が浅く、既存の研究段階からの発展が少ないように思えた。基礎科学に対してPerformance Analysisは応用科学と考えられることから、そういった視点での研究を進める必要があるように感じられた。



大学の様子



発表会場の様子

*鹿屋体育大学スポーツパフォーマンス系



キーノートレクチャーの様子
(演者はウェールズ大学のProf. Mike Hughes)

また筆者の専門であるテニスに関する研究についてもいくつか発表があり、その動向を確認することができた。しかし多くは技術に注目した研究であり、パフォーマンス全体を対象とした研究は少ないように見受けられた。技術を基にしたパフォーマンス、技術レベルに応じたパフォーマンスについての研究は、現時点では国際的にも最先端に近い部分の研究であると確認することができた。

筆者らの発表演題は「THE CONSISTENCY OF TIME DURATION OF SHOTS IN TENNIS AGAINST SAME OPPONENTS」であった。重点研究プロジェクト事業で開発を進めている、テニスの電子スコアブックを用いた分析の成果を発表した。特に電子スコアブックを用いたパフォーマンス評価を行うため、電子スコアブックで得られるデータと実際のゲームの結果との関係について、検討したのが今回の内容である。特定のトッププレイヤー同士の対戦試合を対象に、同じタイプのプレイヤー同士の試合では、そのデータに変動が少ないこと、また異なるタイプのプレイヤーとの対戦においても、サービスのデータについては、変動が少ないことを明らかにした。

発表後は、昨年の在外研究で共同研究を行ったウェールズ大学のProf. Mike HughesやDr. Nick Jamesらから質問を受け、今後の研究にむけてのヒントを得ることができた。

発表にあたって、提出したアブストラクトが学



筆者の口頭発表の様子

会事務局の手違いで受け付けられておらず、受理の確認までに通常よりも時間がかかった。また当初はポスター発表で受け付けられたが、8月に発表されたプログラムを確認した際には、口頭発表となっていた。これまで何度か国際学会に参加した経験から、このような待遇にも慣れてきているが、既に作成済みだったポスターが活用されなかったのは残念であった。

我々のほかにも日本からは名古屋大学の佐々木先生、防衛大学の山本先生、龍谷大学の長谷川先生など、これから日本でもPerformance Analysisを進めていこうとする先生方が多数参加されており、貴重な情報交換の場ともなった。名古屋大学の佐々木先生は以前本学にも奉職されていたり、前回の学会でもお会いしていたことから、現地でも大変お世話になった。この紙面を借りて、あらためて御礼を申し上げたい。



名古屋大学の佐々木先生(右)、龍谷大学の長谷川先生と(左)、中央筆者

私自身にとっては国際学会での発表の経験自体がまだ乏しく、これからも精進していくことが必要と考えている。以前他の先生とも話をした中に出てきたことが「年に1回は国際学会での発表を自分に課す」ということである。その話を伺ってから、自分も真似をするように年1回の国際学会への参加ならびに発表を続けている。国際学会での発表を継続して行っていくことで、他の国の研究者との交流も徐々に増え、ネットワークが広がっていることを実感している。今後も多くの研究者とのネットワークを作っていくために、そのツール（語学）とコンテンツ（自分自身）を磨いていきたい。

今回このような機会を与えてくださった芝山前学長，福永学長，井上前系主任，田口系主任，その他各位に厚く御礼を申し上げます。